

審査の結果の要旨

氏名 前田 英寿

本論文は筆者のいう市街地型街区と街区型建築について、これらを高度かつ良好な都市空間を形成する原型と捉え、その理論を考察し、さらにこれらの原理を適用して実現した幕張ベイタウンを対象に、その実現手法を計画、事業及び設計の各側面から明らかにし、その実現手法を一般化することを目的としている。ここでいう「市街地型街区」とは、適度な規模と形状を持ち、外周道路と空間上機能上連続し、街区どうし隣接して連担し、面的市街地を形成する街区形式を指す。また、「街区型建築」とは、街区形状をなぞるように道路沿いに一定高さの建築を連続配置し、閉鎖型街区を形成する建築様式を指す。後者は通常認知されている建築様式であり、特に新規性はないが、前者はこれまで論じられたことのない、筆者独自の概念及び定義であり、こうした街区の視点から良好な都市空間形成のための実践的な手法を明らかにしようとした点に本論文の独自性がある。

論文は5つの章と序章、結論を述べた結章、そして補章の合計8つの章から成っている。

序章では、研究の位置づけと研究の構成、並びに用語の定義が行われている。とりわけ前述したように「市街地型街区」の定義は、「郊外型街区」や「団地型街区」と比較して新たに本論文において意識的に命名された街区の一様式として注目に値する。

主要な5つの章は以下の構成である。第1, 2章は計画論である。第3章は事業論である。第4, 5章は設計論である。

第1章では、幕張ベイタウンを対象に、マスタープランがどのような意図のもとに立案されたのかを明らかにしている。その結果、約80m角の標準街区と16mないし18mから成る道路幅員を単位として住宅地全体を構成し、大街区もこの倍数で割り付けるといった空間の単位性を明確にし、同時にヒューマンスケールを担保することに成功している点を明らかにしている。

第2章では、街区型建築の典型である中層沿道囲み型住宅の設計指針の策定プロセスとその構成を論じている。その結果、基本形態・外観意匠・構成要素を規定しつつ、実施設計レベルのモデル設計を行うことによって実施可能性を詳細に検討し、同時にガイドラインを具体的な運用と連動することによって柔軟かつ効果的な実施を可能にしている点を明らかにしている。

第3章では、前2章において考察したマスタープランとガイドラインが計画した市街地型街区と街区型建築の実現に向けて、開発者と事業者と計画設計技術者がいかに協働して

事業を実現に向かわせたかに関してその仕組みを明らかにしている。とりわけ事業構成及び計画設計調整者の双方において多層性と多次元性を確保する仕組みを明らかにし、これによって実際の市街地の状況に近似した事業状況を生みだし、都市的な空間の実現を可能にするための方策を明らかにしている。

第4章は、中層囲み型住宅の設計技法を論じている。とりわけモデル設計の重要性とこれを超越した計画に対する柔軟な調整のあり方、道路主体の地区空間設計のあり方、日照重視及び接地階処理の独自の手法、街区の規模形状の法則性を明らかにしている。

第5章は、第4章と同様の分析を超高層及び高層住宅についておこなっている。なかで、中層街区と協調することによって大空間を分節し、段階的に構成することを可能とする手法が明らかにされている。また、計画調整のプロセスを重視し、また開発者と事業者の応答を可能とすることによって現実的な設計が実現することを明示的に示している。

以上をまとめることにより、結章において、空間の分節・計画の連動性とモデル設計の裏付け・協働検討体制・事業の段階的組立て・設計調整の種類・地区設計・計画設計調整業務の7点に関して、新規の提案を行うことに成功している。

補章では、市街地型街区と街区型建築に至る住宅団地設計の変遷について総括的にまとめている。

これらの成果によって、市街地型街区と街区型建築の実現に関する実証的かつ現実的な手法が初めて明らかにされている。同知見は今後の我が国における都市設計に重要な示唆を与えるものである。

よって本論文は博士（工学）の学位申請論文として合格と認められる。